様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２４５５

研究課題名（和文）「学び続ける教員」の基盤の育成を志向する教員養成スタンダードの開発的研究

研究課題名（英文）The developmental research on standards for initial teacher education aiming to foster the fundations of "teachers who continue to learn"

研究代表者
別惣　淳二（BESSO, Junji）

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：９０３０４１４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：教員養成課程の大学の4年次生に理想の教師像を調べた結果、「子供理解や子供との関わり」を基盤とし、「授業内容・方法を工夫する」「生徒指導・学級経営・特別活動を工夫する」「自己の生き方・在り方を考える」「他の教師との協力関係を大切にする」が複合的に絡み合った教師像をもつ傾向にあった。
2年間にわたる質問紙調査から、「教職に必要な基本的素養」と「児童生徒理解のための力」を基盤としつつ、「教科等の授業計画・実施・評価・改善のための力」「学級経営、生徒指導・教育相談、キャリア教育、特別活動のための力」等を絡み合わせながら省察によって、「学び続けるための力」を身につけていく教員養成スタンダードを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、教員養成スタンダードの開発に学ぶ側の学生の視点を取り入れるために、縦断的手法により、教員養成課程における学生の理想とする教師像の特性とその形成過程の実態を明らかにした点に学術的な意義がある。
また、「学び続ける教員」になるための基盤を育成するために養成段階において学生にどのような資質・能力を身につけさせる必要があるのかを、近畿圏の教育委員会の指導主事や国立大学附属小・中学校教員並びに全国の教員養成担当の大学教員や全国の公立小・中学校教員を対象に実施した質問紙調査から、明らかにした点に学術的な意義がある。

研究成果の概要（英文）： When fourth-year students in teacher training courses were surveyed about the ideal image of a teacher, they tended to have the ideal image of a teacher based on " understanding and interacting with children," combining a complex mix of "devising lesson content and methods," "devising student guidance, classroom management, and extracurricular activities," " considering one's own way of life and existence," and "valuing cooperative relationships with other teachers."
From a two-year questionnaire survey, we developed standards for initial teacher education that is based on "basic competence of performing in teaching profession" and "competence to understand students," while also incorporating "competence to plan, implement, evaluate, and improve lessons in subjects," "competence for classroom management, student guidance and counseling, career education, and extracurricular activities," and through reflection, helps students acquire "the ability to continue learning."

研究分野：教師教育学

キーワード：教員養成スタンダード　学び続ける教員　資質・能力　教師像　資質能力観

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申では、「教員になる前の教育は大学、教員になった後の研修は教育委員会という、断絶した役割分担から脱却し、教育委員会と大学との連携・協働により教職生活全体を通じた一体的な改革、学び続ける教員を支援する仕組みを構築する必要がある」と述べて、「学び続ける教員像」の確立を打ち出した。これを受けて、平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申では、「学び続ける教員像」を具体化するための政策提言がなされ、教員育成指標や教員研修計画の策定の必要性が述べられた。これにより、「学び続ける教員像」に関する研究は、現職教員を対象とした研究が多くを占めている。しかし、養成・研修の連続性を考慮に入れれば、養成段階において「学び続ける教員」になるための基盤を身につけさせる必要があると考えられる。

そこで、養成段階において、「学び続ける教員」になるための基盤を身につけるためには、大学 4 年間でどのような資質・能力を身につける必要があるのかが当面の研究課題となる。教員として最小限必要な資質・能力を示した教員養成スタンダードは、既に兵庫教育大学などのいくつかの教員養成系大学で開発されているが、教員養成スタンダードは、教育委員会の指導主事、各大学や各小学校の教員からの考えや意見に基づいて作成されている。教員養成スタンダードが学生に教えるための指標であるだけでなく、学生自身が学ぶための支援的な指標でもあると考えれば、学生がどのような教員像を理想に掲げて大学に入学し、その後、大学で教員養成教育を通してどのような見習いたい教師像を形成しながら教員として必要な資質・能力を身につけていくのかという形成過程を明らかにし、その結果を踏まえながら教員養成スタンダードを開発する必要がある。

また、教員養成の質保証の観点から、これまで各大学で開発されてきた教員養成スタンダードの課題になっていたことは、教職実践演習において「教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて学生が身につけた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたか」を各大学が養成する教員像や到達目標に照らして確認することになっているが、教員養成スタンダードが「教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成された」ものとして明示化されていないために、教職実践演習では使えないという問題点もあった。そのため、「学び続ける教員」になるための基盤を身につけるためにも、大学 4 年間で学生が身につけるべき資質・能力は、どのように資質・能力が有機的に統合され、形成されているのかを明らかにする必要がある。

このことを明らかにするためには、教員養成課程の学生が 4 年間にわたってどのような資質・能力を身につけた教師を理想の教師と捉えているのか、そして、その教師とはどのような出会いや出来事によって形成されているのかに注目して調査を行うことが有力であろう。

また、平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申が出されて以降、「学び続ける教師」の基盤を養成段階で身につけるために学生にどのような資質・能力を身につけさせる必要があるのかに注目した研究は管見の見る限り見当たらない。そのため、将来学生を教員として受け入れる側である教育委員会の指導主事、全国の学校教員ならびに大学教員に対しても「学び続ける教員」を育成する上で養成段階において学生にどのような資質・能力を身につけさせる必要があるかを調査し、明らかにする必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は、教員養成課程における学生の理想の教師像の特性とその形成過程を明らかにするとともに、近畿圏の指導主事や国立附属小中学校の教員ならびに全国の教員養成大学の大学教員、全国の公立小中学校教員に対して質問紙調査を行い、「学び続ける教員」を育成する上で養成段階において最小限身につけておくべき資質・能力とは何かを明らかにすることによって、「学び続ける教員」の基盤の育成を志向する教員養成スタンダードを開発することである。

３．研究の方法

(1)（1 年目：令和 2 年度）教員養成課程をもつＨ大学の４年次生を対象に実施した質問紙調査から、４年次生が有する理想の教師像と大学卒業時までに小学校教員として身につけるべき資質・能力を明らかにする。質問紙調査では研究代表者が４年次生 170 人を対象に、「これまで出会った教員の行動や考え方の中で、自分が特に見習いたいと考えていることは何か」と「小学校教員を志望する学生が大学卒業時に身につけておくべき資質・能力としてどのようなものが考えられるか」の設問について記述式で回答を依頼し、回答の同意が得られた者のみ記入してもらい、その場で回収する。その記述内容についてＫＪ法を用いて研究代表者と研究分担者が協議しながら、見習いたい教師の行動や考え方と、大学卒業時までに小学校教員として身につけるべき資質・能力について分析を行う。

(2)（2 年目：令和 3 年度）教員養成課程をもつＨ大学の学生で１年次から 4 年次まで「これまで出会った教員の行動や考え方の中で、自分が特に見習いたいと考えていることは何か」と「小学校教員を志望する学生が大学卒業時に身につけておくべき資質・能力としてどのようなものが考えられるか」を設問にした質問紙調査にすべて回答してきた学生の質問紙を抽出し、4 年間の記述内容を研究代表者と研究分担者で協働して分析・解釈し、学生が 4 年間でどのような資質・能力を有する教員を目指しているのかその変化のプロセスを明らかにする。併せて、当該学生の履修カルテの資質・能力の記述内容も分析対象として用いて分析・解釈を行い、大学卒業時までにどのような資質・能力を身につける必要があると考えているのか、また、学生は体験と省察を往還しながら、何をどのように学んでいるのかを明らかにする。

(3)（3 年目：令和 4 年度）第１次調査（予備調査）として、近畿圏の教育委員会の指導主事や国立附属小中学校の教員、教員養成課程認定大学の大学教員ならびに全国の教員養成大学の大学教員、計 1000 人

を対象に「『学び続ける教員』になるための基盤として教職志望の学生が大学卒業時に教員としてどのような資質能力を身につけておく必要があるか」について質問紙調査（記述式）を実施し、KJ 法を用いて研究代表者と研究分担者が協議しながら分析し、養成段階で教員として身につけておくべき資質・能力を確定する。

(4)（4 年目：令和 5 年度）第 2 次調査（本調査）として、第 1 次調査で特定された資質・能力の妥当性を検証するために、全国の公立小中学校教員 2100 人を対象に、「学び続ける教員」になるための基盤として、それらの資質・能力を大学卒業時までに身につけておく必要性について質問紙調査を実施し、4 件法（「1．身につける必要はない」「2．やや必要である」「3．かなり必要である」「4．非常に必要である」）で評価を求める。得られた回答を統計解析し、必要な資質・能力を同定する。研究代表者と研究分担者は、この結果と 2 年目までの研究結果を組み合わせながら資質・能力の構造化を図り、「学び続ける教員」になるための基盤を育成する教員養成スタンダードを開発する。

４．研究成果

(1) 1 年目：令和 2 年度

分析の結果、4 年次の学生は、「子ども理解や子どもとの関わり」を基盤としながら、「授業内容・方法を工夫する」「生徒指導・学級経営・特別活動を工夫する」「自己の生き方・在り方を考える」「他の教師との協力関係を大切にする」といった要素が複合的に絡み合った教師像を持つ傾向にあった。4 年次の多くの学生は教育実習で出会った教師の行動や考え方から、「子どもとの相互作用の中で成長する教師」像を形成していた。このことから、政府の政策提言や大学の教員養成スタンダードに示された「学び続ける教師」像には解消されない、多様な側面を学生の教師像が持っている、という事実が明らかになった。

大学卒業時までに小学校教員として身につけるべき資質・能力に関しては、「教師としての基本的素養」「教科等の指導する能力」「子ども理解の能力」「学び続ける能力」「連携・協働する能力」「学級経営能力」「生徒指導能力」を回答していた。4 年次の学生は、「学び続ける能力」よりも「教師としての基本的素養」「教科等の指導する能力」「子ども理解の能力」の方を重視する傾向が読み取れた。また、回答が最も多かった資質・能力は「教師としての基本的素養」であり、その内、「社会人としての素養」の回答件数が最も多かった。さらに、学生の見習いたい教師像の要素が複合的に絡み合って教師像が形成されるに伴って、「教師としての基本的素養」や「教科等の指導をする能力」や「子ども理解の能力」や「学び続ける能力」や「連携・協働する能力」や「学級経営能力」や「生徒指導能力」といった身につけておくべき資質能力も徐々に関連づけられて回答されていた。それは同時に、学生が意識している資質・能力は個別に分断して存在しているのではなく、資質・能力が相互につながりをもって存在していることを示していると推察された。

(2) 2 年目：令和 3 年度

教員養成課程をもつ H 大学の学生を対象に 1 年次から順次縦断的に実施した質問紙調査のうち 4 年間すべての調査に回答した 32 件の記述データを分析し、学部 4 年間における学生が見習いたい教師像と大学卒業時に小学校教員として身につけておくべき資質能力観の変化を示す。次に、学生の履修カルテの記述内容を分析することによって、学部 4 年間における体験と省察の往還としての学びの実態を示す。最後に、体験と省察の往還の観点から、学生の見習いたい教師像と資質能力観の形成過程に見られる特徴を明らかにする。

1 点目の成果は、体験と省察の往還という観点から、教員養成課程における学生の教師像と資質能力観の形成過程を直線的な成長・発達プロセスではなく、過去と未来、古いものと新しいものの間で行きつ戻りつしながら変化していく過程として明らかにした。

2 点目の成果は、学生の見習いたい教師像と資質能力観の形成過程に見られる共通性と多様性を明らかにした。共通性として明らかになったのは、教師像の変化の基盤には子どもとの関わりや子ども理解が存在しているということである。つまり、教員養成課程の学生は子どもとの相互作用の中で学び続けている点では共通しているのである。その一方で、体験に含まれるものや、そこから学んでいる内容は多様である。体験は教育実習ばかりではなく、卒業研究や授業科目におけるフィールドワークなどの探究活動も含まれていた。したがって、体験と省察の往還は、学校の実践と大学の理論の間だけで起こるのではなく、自分の身に起こった出来事を記述しながら意味づける、あらゆる場面で起こるのである。

3 点目の成果は、学生の見習いたい教師像と資質能力観の形成過程には、過去の教育体験が連続的に保持される過程と、ある出来事をきっかけにして非連続的に変化する瞬間があるということを示した。教職の社会化プロセスにおける「観察による徒弟制」(Lortie, 1975)の問題は、過去の学校体験が教員養成課程での学修の阻害要因になる点にあったが(Korthagen, 2001)、本研究では大学の講義や教育実習等をきっかけにして教師像や資質能力観を変化させているケースも稀ではなかった。学生の先入観は新しい学びを阻害する要因になるとは限らず、むしろ、学び続けることを可能にする条件と考えることもできる。そうした点から言えば、学生の先入観を揺るがす体験が省察を促すことになると考えられる。

(3) 3 年目：令和 4 年度

3 年目の研究では、「『学び続ける教員』になるための基盤として学生が大学卒業時までに教員として身につけるべき資質能力に関する調査」（質問紙調査）を第 1 次調査（予備調査）として実施した。調査対象者は、H 県下の教育委員会の指導主事（小中学校）、近畿地区国立大学附属学校教員、全国教育大学及び近畿地区国私立大学教育学部の教員、計 1000 人を対象とした。調査時期は、令和 4 年 7 月下旬に調査

依頼をし、協力いただける教育機関に対し令和4年9月1日～9月30日にMicrosoft Formsからの記述回答を求めた。その結果、136件の記述回答が得られた。

記述回答をKJ法により分類した結果、(1)学び続ける姿勢と力、(2)児童・生徒の発達段階や多様性の理解と関わり方、(3)教科等の指導方法及び学習環境、(4)教科等の指導上の専門的知識・理解、(5)教科等の指導計画の立案と授業評価、(6)児童・生徒の学習活動における評価観点と評価方法、(7)学級の運営や経営、(8)学級・学年での生徒指導や教育相談、(9)キャリア教育を視野に入れた進路指導、(10)特別活動における企画・運営・指導、(11)特別な配慮や支援が必要な児童生徒への対応、(12)教育におけるICTや情報データの利活用、データリテラシー、(13)教員としてふさわしい言動・態度・意識・倫理、(14)教員同士や専門スタッフとの連携・協働や保護者・地域との関係づくり、(15)社会の変化に対する学校の役割・職務内容と意義、(16)教員としての幅広い教養、(17)教育制度・法規及び学校の経営的事項の理解、(18)教育の理念、教育に関する歴史及び思想、(19)教育課程の意義及び編成の方法、(20)教育の方法及び技術、(21)STEAM教育などの領域からなる39項目の資質能力の内容に集約した。

(4) 4年目：令和5年度

4年目の研究では、3年目の研究で得られた39項目が養成段階で最小限身につけるべき資質・能力であるかを検証するために、2023年度全国学校総覧からランダムサンプリング法によって700校の公立小中学校を選出し、各学校から3名の教員（管理職、10年以上の教職経験の教員、10年以下の教職経験の教員）に回答してもらえるように依頼した。調査時期は令和5年11月に学校長宛に調査依頼をし、調査に協力いただける学校に対して令和6年1月～2月にMicrosoft Formsによる回答を求めた。その結果、306件の回答が得られた。

本調査では、選択肢2～4を選択した回答者は当該資質能力を大学卒業時に身につけておくことを肯定的に捉えているとみなし、チャンスレベル（偶然による回答者の支持確率）が75%であることを前提に、肯定的な評価が8割以上であることを、当該項目が「大学卒業時に教員として身につけておくべき資質能力」として支持されたと判断する基準とした。そして、39項目がこの基準を満たしているかを二項検定（有意水準0．5%）によって分析した結果、全ての項目が有意であった(表2)。

このことを踏まえ、39項目を8つの資質能力の基準と39の資質能力の指標に分類し、「教職に必要な基本的素養」と「児童生徒理解のための力」を基盤としつつ、「教科等の授業計画・実施・評価・改善のための力」「学級経営、生徒指導・教育相談、キャリア教育、特別活動のための力」「特別な支援や配慮を必要とする児童生徒に対応するための力」「ICT、情報・教育データ、情報教育を利活用するための力」「学校運営に関わる教職員間、保護者、地域、他機関との連携・協働のための力」を複合的に絡み合わせて学び、自己の体験を省察したり自分の身に起きた出来事を意味づけたりしながら「学び続けるための力」を身につけていく教員養成スタンダードを開発した（表3)。

表1　第2次調査のフェースシート

所属	小学校	中学校
%	50	50

年齢	25歳未満	25～29歳	30～39歳	40～49歳	50歳以上
%	4.9	14.1	19.6	25.8	35.6

教職経験年数	5年未満	5～10年	11～15年	16～20年	21年以上
%	13.4	17	10.1	14.4	45.1

職名	校長・副校長・教頭	主幹教諭・	教諭
%	34.3	7.8	57.8

表2　第2次調査における資質能力の評価

	1. 身につける必要はない	2. やや必要である	3. かなり必要である	4. 非常に必要である	平均値	標準偏差	二項検定
(1)謙虚な姿勢と向上心をもって、自身の実践を省察しながら学ぶ力	0.3	7.2	30.7	61.8	3.54	0.64	***p<.001
(2)問いを立てて自らの課題を設定し、主体的に探究する力	2.6	27.5	43.5	26.5	2.94	0.80	***p<.001
(3)教員として学び続けることの意味や有用性を理解する力	2.9	18.3	42.5	36.3	3.12	0.81	***p<.001
(4)児童・生徒一人一人の生育歴・家庭環境を知った上で、児童・生徒一人一人の特性や能力を理解する力	7.2	43.8	31.7	17.3	2.59	0.86	***p<.001
(5)児童・生徒一人一人の個性、多様性、ニーズを理解して、一人一人に応じた指導・支援を行う力	6.5	40.2	37.6	15.7	2.62	0.83	***p<.001
(6)児童・生徒の発達段階を理解し、児童・生徒への関わり方についての知識及び技術を身につける力	2.0	33.0	47.7	17.3	2.80	0.74	***p<.001
(7)学習指導要領の内容を意識して、教科等の指導法及び学習環境に関する知識及び技術を身につける力	1.0	32.4	47.1	19.6	2.85	0.73	***p<.001
(8)学習指導要領を理解した上で、教科等の内容に関する専門的知識を身につける力	2.3	30.1	47.4	20.3	2.86	0.76	***p<.001
(9)学習指導要領を理解した上で、教材研究を行い、単元や授業の指導計画を立案し、授業後に授業の評価や改善に取り組む力	2.9	39.2	44.4	13.4	2.68	0.74	***p<.001
(10)児童・生徒一人一人の学力向上に資する「わかる授業」「楽しい授業」「達成感のある授業」を実践する力	5.9	45.4	34.6	14.1	2.57	0.80	***p<.001
(11)児童・生徒の学習評価の目的と方法を理解する力	4.9	45.1	39.2	10.8	2.56	0.75	***p<.001
(12)児童・生徒が自分の居場所として安心して過ごせる学級をつくる力	5.6	38.2	35.0	21.2	2.72	0.86	***p<.001
(13)学級の運営や経営についての知識及び方法を身につける力	5.2	40.8	40.2	13.7	2.62	0.79	***p<.001
(14)子ども同士、子どもと教員との共感的人間関係を築くための学級経営をする力	5.2	36.3	36.6	21.9	2.75	0.86	***p<.001
(15)生徒指導や教育相談についての知識及び技能を身につける力	5.2	41.5	37.6	15.7	2.64	0.81	***p<.001
(16)問題行動や不登校に対する知識及び対応の仕方を身につける力	6.9	41.5	37.9	13.7	2.58	0.81	***p<.001
(17)キャリア教育を理解し、キャリア教育の目標から学校教育について考える力	11.8	57.2	25.5	5.6	2.25	0.73	***p<.001
(18)キャリア教育の観点から児童・生徒の進路指導をする力	19.0	56.9	19.3	4.9	2.10	0.76	**p<.01
(19)特別活動の目標を理解し、児童・生徒主体の運営の方法や児童・生徒への支援方法を考える力	6.9	52.3	33.0	7.8	2.42	0.73	***p<.001

(20)特別支援に関する知識や技能を学ぶとともに、特別な配慮や支援が必要な児童・生徒に対して常に適切な配慮・支援を模索する力	2.3	37.3	42.2	18.3	2.76	0.77	***p<.001
(21)特別な配慮や支援が必要な児童・生徒を認め支え合える学級づくりをどう進めていくかを考える力	2.9	41.5	39.9	15.7	2.68	0.77	***p<.001
(22)ICTや情報・教育データを授業などの教育の場で効果的に活用する力	3.9	30.7	45.8	19.6	2.81	0.79	***p<.001
(23)コンピュータ等で使用するアプリケーションの操作スキルを身につける力	2.6	31.7	44.4	21.2	2.84	0.78	***p<.001
(24)情報教育（情報モラル教育、プログラミング教育を含む）に関する知識や技術を学校での教育に生かす力	4.9	35.9	44.4	14.7	2.69	0.78	***p<.001
(25)教員として求められる言動、態度、倫理観、人権意識を身につける力	0.0	4.6	29.4	66.0	3.61	0.57	***p<.001
(26)社会人としてのマナー、言葉遣い、コミュニケーション力、対人関係能力、協調性を身につける力	0.3	2.9	21.9	74.8	3.71	0.53	***p<.001
(27)教員としての使命感、教育的愛情、責任感、忍耐力をもって教育活動にあたる力	0.7	10.5	33.7	55.2	3.43	0.70	***p<.001
(28)教員として体調管理や精神面の安定を図る力	1.6	17.3	34.6	46.4	3.26	0.80	***p<.001
(29)チームで働くという視点から、教員同士や専門スタッフとの連携・協働の関係性を築く力	1.0	11.8	38.2	49.0	3.35	0.72	***p<.001
(30)保護者や地域との良好な関係を築く力	7.5	32.0	39.9	20.6	2.74	0.87	***p<.001
(31)多様化する教育課題に対応するために、他機関との連携を図る力	18.3	46.7	26.8	8.2	2.25	0.85	**p<.01
(32)学校教育の役割を理解し、教職の職務内容・役割と意義について理解を深める力	8.2	35.0	35.9	20.9	2.70	0.89	***p<.001
(33)幅広い教養や見識を身につける力	1.6	19.3	45.8	33.3	3.11	0.76	***p<.001
(34)社会状況の変化とその変化が学校教育に与える影響や課題、及び教育政策動向や教職を巡る教育制度・関係法規について理解を深める力	9.5	41.8	35.3	13.4	2.53	0.84	***p<.001
(35)学校経営の観点から、学校と地域との連携に関する知識と学校安全への対応に関する知識を身につける力	12.4	50.0	29.1	8.5	2.34	0.80	***p<.001
(36)教育の理念並びに教育に関する歴史や思想の理解を深める力	16.7	53.6	22.9	6.9	2.20	0.80	***p<.001
(37)学校における教育課程の役割・機能や編成方法を理解するとともに、カリキュラム・マネジメントの意義を理解する力	14.4	51.3	27.1	7.2	2.27	0.79	***p<.001
(38)授業等で用いる教育方法論や指導技術に関する知識及び技能を身につける力	1.0	42.5	42.5	14.1	2.70	0.72	***p<.001
(39) STEAM教育等の教科等横断的な教育を行うための専門的知識及び技能を身につける力	12.1	53.6	30.1	4.2	2.26	0.72	***p<.001

表3　「学び続ける教員」の基盤の育成を志向する教員養成スタンダード

資質・能力の基準	資質・能力の指標
学び続けるための力	謙虚さと向上心を伴った自己省察力
	問いを立てて課題探究する力
	教員として学び続けることの意味と有用性の理解
↑	↑ ↑
教科等の授業計画・実施・評価・改善のための力	教科等指導法と学習環境の知識・技術
	教科等の内容の専門的知識
	教材研究・指導計画立案・授業評価・授業改善
	授業実践力
	学習評価力
	STEAM教育等の知識・技能
学級経営、生徒指導・教育相談、キャリア教育、特別活動のための力	学級づくりの力
	学級経営の知識と方法
	共感的人間関係を築く学級経営
	生徒指導や教育相談の知識・技能
	生徒指導上の問題への対応
	キャリア教育の理解
	キャリア教育の視点からの進路指導
	特別活動の理解と支援方法
特別な支援や配慮を必要とする児童生徒に対応するための力	特別支援の知識・技能と配慮・支援の力
	特別支援の児童・生徒を含めた学級づくり
ICT、情報・教育データ、情報教育を利活用するための力	ICTや情報・教育データの利活用
	アプリの操作スキル
	情報教育の知識・技術を学校教育に活かす力
学校運営に関わる教職員間、保護者、地域、他機関との連携・協働のための力	教員同士や専門スタッフとの連携・協働
	保護者や地域との良好な関係性
	他機関との連携を図る力
	学校と地域の連携と学校安全への対応の知識
児童生徒理解のための力	児童生徒理解力
	児童生徒理解に基づく指導・支援
	発達段階の理解に基づく関わる力
教職に必要な基本的素養（幅広い教養と教育の原理的理解を含む）	教員としての言動、態度、倫理観、人権意識
	マナー、言葉遣い、コミュニケーション力、対人関係力能力、協調性、ファシリテーション能力
	教員としての使命感、教育的愛情、責任感、忍耐力
	体調管理や精神的安定性
	幅広い教養や見識
	教職の職務内容・役割と意義の理解
	社会状況の変化が学校教育に与える影響、教育政策・教育制度・関係法規の理解
	教育の理念と教育の歴史や思想の理解
	学校の教育課程の役割とカリキュラム・マネジメントの理解
	教育方法論と指導技術の知識・技能

＜引用文献＞

①Korthagen, F.A.J., Kessels, J., Koster,B., Lagerwerf,B., Wubbels,T.(2001). *Linking Practice and Theory. The Pedagogy of Realistic Teacher Education.* Lawrence Erlbaum Associates.
②Lortie, D.C.(1975). *Schoolteacher: A Sociological Study.* The University of Chicago Press.
③Mezirow, J.(1991). *Transformative Dimensions of Adult Learning.* Jossey-Bass.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 別惣淳二，大関達也	４．巻 66
２．論文標題 子どもとの相互作用の中で成長する教師―教員養成課程における4年次生の教師像と資質能力の分析から―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育学研究紀要	６．最初と最後の頁 668～679
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 別惣淳二，大関達也
２．発表標題 教員養成課程における学生の教師像と資質能力観の形成過程に関する研究――学部4年間における体験と省察の往還としての学びの分析から――
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 別惣淳二，大関達也
２．発表標題 子どもとの相互作用の中で成長する教師―教員養成課程における4年次生の教師像と資質能力の分析から―
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	大関　達也 (OZEKI Tatsuya) (80379867)	兵庫教育大学・学校教育研究科・教授 (14503)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関